

常盤の庭

長唄 全詞章

杵屋六左衛門 述

資料の題名『常磐庭』

そもそも厳嶋の御社は、人皇七十四代の御宇かとよ、再建ありし宮柱、幾百歳か白浪に
数の灯火照り渡り、その面影を吾妻なる

眺めは築地海原の、南は蒼海雲につづき

遠山遙かに薄がすみ

千船百船行き通ふ、春の曙

不二の雪、長閑に匂ふ朝日影

〔三下り〕 仇と恋とを空せ貝、もしや海松布を打寄る浪に、撫子貝の可愛らし

さしくる汐に漕ぎ来る

〔三下り〕 床しき船の青簾、音締も高き高輪に、なれて鷗の三つ四つ二つ六つ、むつまし竹芝に
見えつかくれつ沖洲の蘆に、翼すずしき夕まぐれ身に入む頃は立秋の

苦屋の煙限どりて、絵嶋が崎や明石潟

須磨の浦辺で汐汲む海士は、しんきらしいぢやないかいな、よいよいよいよいやさそれへ

ここは小浜の月をめ

霜をかさねて打つ砧

はつ冬の板屋を叩く玉霰、音もさむけき閨の戸を、さきでなぐさむ友千鳥、ちりやちりちり
ちりちりはつと、夜半の漁火四ツ手網、世わたる業のしなじなは、言の葉草の及びなき

〔本調子〕 ただ此の庭は年毎に、松の緑のおひ茂り、四季折々の風景は弁財天女の御めぐみ、

福寿円満限りなき

舞の秘曲の面白や

浪の鼓に笛竹の、十二の律を三筋の糸に、調べととなふひと節は、春夏秋冬楽しみの、千代に

万代祝し祝して